Osaka University Knowledge Archive

Title	日本とラテンアメリカの国民形成に関する移民史研究ーブラジルとアルゼンチンにおける日本移民を中心に(1884-1951)ー
Author(s)	Garasino, Facundo Julian
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/77584
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　　（ Garasino Facundo Julian ）	
論文題名	日本とラテンアメリカの国民形成に関する移民史研究 ―ブラジルとアルゼンチンにおける日本移民を中心に(1884-1951)―

論文内容の要旨

本論文は、1880年代から1950年代初頭にかけての時期を対象に、ブラジルとアルゼンチンを中心にしたラテンアメリカ諸国における日本人移民について、海外移民をめぐる言論と思想、および移民事業や移民自身の活動を検討することにより、送出国と移住国の双方における移民と国民形成の関係を明らかにしようとしたものである。本論文は序論と4つの章、補論および終章から構成されている。

1880年代以降の日本において、モノや資本、情報、さらには人の越境的移動ネットワークを国益の追求や国民形成の舞台として捉え、移民をその主体として捉えた思想は、知識人や官僚、および実業家や移民の一部の間に支持された。これに対して、ラテンアメリカ諸国の政治的エリートと知識人は、新国家の領土を空白地帯とみなし、ヨーロッパ出身の移民を導入することで、経済的・社会的近代化や国民形成を構想していた。

序章では、移民と国民形成をめぐる上記の対照的な歴史に着目しつつ、先行研究を整理し、本論文の課題と方法論を提示した。まず、中南米を対象とした日本語圏の日本移民史に大きな影響を与えたエスニシティ論を検討し、次には移民を媒介とした日本の国民統合、国家建設、帝国主義的膨張や入植者コロニアリズムを論じた近年の英語圏の研究を分析した。その際、移民と日本の関係の維持・再構築を対象化しつつも、同時にラテンアメリカの移住国における国民国家の建設をめぐる政治的・経済的状況をも十分に踏まえたうえで、移民が送出側と受入側の両方の国民形成とどのようにかかわったか、という問題が残されていることを指摘した。この問題に対処すべく、トランスナショナリズム論やグローバル・ネーション論を参照するとともに、ラテンアメリカ諸国の国民形成における移民の位置づけに注目することを提起した。本論文では、白人系移民を新興国家の近代化を推し進める新しい国民的主体の中核として特権化した移住国の人種主義への対応に注目しつつ、日本人移民や彼ら彼女らにかかわった事業家が、日本とラテンアメリカの両方における国民形成をどのように調停しようとしたかを論じていった。

第1章では、近代日本とラテンアメリカにおける近代国家の成立過程を背景として、両者における移民を媒介にした国民の形成をめぐる言論や、移民送出事業・移民政策の成立を論じた。本章では、日本人労働者のハワイ渡航を規定した条約の内容がまとめられた1884年から、ブラジルへの契約労働移民が開始した1908年前後までの時期を対象とした。その際、榎本武揚（1836-1908）を中心とした外務省系官僚、議員や実業家が1893年に結成した殖民協会という半官半民的団体が行ったラテンアメリカ諸国に関する現地調査や、いわゆる「メキシコ榎本殖民」事業を検討した。さらに、日露戦争後において植民地帝国となり国際的秩序のなかで「一等国・文明国」と承認された日本の海外移民の新たな方針とされた「平和的膨張論」をめぐる浮田和民の言論を考察した。これらの事例を通して、世紀転換期の日本では、移民事業が送出側の国益を追求するだけではなく、同時に移住国の経済的・政治的課題との交渉や両立をも考慮しなければならないと主張する移民論が登場したことを明らかにした。

第2章では、移民の教育、渡航斡旋や入植後の組織化に携わった永田稠（ながた・しげし　1881-1973）を取り上げ、とりわけ1920年代から1930年代にかけて彼が携わったブラジル・サンパウロ州での集団移住地建設事業をめぐる言論を分析した。その際、永田の言論と移民事業が日本とブラジルの国民形成をめぐる社会思想とどうかかわったかを検討した。永田は、移民事業の社会的意義を主張し、移民の教育や指導を行うに際して、「霊肉救済」というキリスト教信仰や、フロンティア論的な入植者コロニアリズム、そして国体論と海外発展論的な膨張主義とを独自に接合させた言論を展開した。それは、絶えない移動や未開墾地域の開拓、そして現地社会の「文明化」を軸とした「植民建国」または「移住建国」として「日本民族」の歴史を描いたものであり、この歴史の延長として移民事業を位置づけたものであった。これに基づき、永田は、移民事業を通してエスニック共同体としての「日本民族」の経済的、社会的、文化的、そして道徳的な改善を提唱した。ただし、このような移民論は、帝国主義的勢力間の競争と対立という同時代状況を意識しつつも、他方では、ブラジルにおける国民創出、人種と移民をめぐる議

論とすれ違ってしまった。このように永田の移民論は、多民族が住む広大な領土のブラジルにおいて国民共同体はどうあるべきかという課題に対する問題意識を持ちながらも、同様の課題に取り組むべく同時代のブラジルで盛んに議論されていた混血国民論やこれを踏襲した政治的動向とかかわることなく、平行路線を走り続けた。

第３章では、政治家かつ実業家であった上塚司(うえつ・かつかさ　1890-1978）がアマゾナス州政府とのコンセッション契約に基づいて1930年代に経営した移民送出と農業開発事業を考察した。上塚の事業理念は、日本の移民、資本と文化をアマゾンに移植し、グローバルな規模で需要を持った商品を供給する農業を開発することで、土地、資源と市場をめぐる欧米資本主義先進国との競争に打ち勝ち、日本民族の海外膨張や帝国の経済的発展に資することを展望していた。一方、1930年代を通して、ブラジルの政治家と知識人の一部は、同時期の中国における帝国日本の軍事的侵攻を取り沙汰しながら、辺境地帯の未開墾地への入植事業を侵略の前段階として危険視して、日本人移民の入国制限や入植事業の阻止を試みた。さらに、ヴァルガス政権（1930-1945）が中央集権国家の確立に乗り出し、ナショナリズムの喚起によって国民的統合の再編と強化を試みたが、その一環として移民の文化的差異やエスニシティの表現を禁じた同化政策を実施した。ただし、この状況にもかかわらず、アマゾニア産業研究所の事業は、ジュート生産を軸として1937年から1941年にかけて発展を遂げた。アマゾン流域でのジュート生産は、ヨーロッパでの戦争勃発による物流の途絶や貿易の縮小に対応するための戦略的物資の確保や国際貿易の多様化を進める上で国家的関心と支援の対象となった。このように、日本人移民がアマゾン流域の農業開発とブラジル国家経済の構築の一翼を担うようになると、移民による農業開発を媒介とした「日本民族」の海外膨張と帝国日本の経済的進出を掲げたアマゾニア産業研究所と、同質的な国民統合の強化と計画経済の構築を目指したブラジル連邦政府とがすれ違ったまま、アマゾン流域で提携した。この事例を通して、資本、労働力や戦略的農業産物の生産は、アマゾン流域の入植地において複数の国民的プロジェクトの共存を可能にしたことを指摘した。

第4章では、アルゼンチンに移民し、国際貿易やジャーナリズムに携わった榛葉贇雄（しんや・よしお　1884 - 1954）に焦点を当てて、1930年代から1940年代にかけて、ブエノスアイレスの社会的エリートとの協働や、日本外務省の外郭団体であった国際文化振興会との連携で彼が展開した言論活動を考察した。これを通して、榛葉が日本とアルゼンチンのナショナリズムを調停・架橋させることにより、帝国の文化宣伝の一端を担いつつも、同時に移住国における日本人移民の国民的統合を試みたことを明らかにした。榛葉は、日本人移民が欧米諸国の出身者と同等に、あるいはそれ以上にアルゼンチンの国民形成に貢献できると主張した。これを通して榛葉は、アルゼンチンの国民形成の支配的なイデオロギーと政策の根幹にあった、白人を特権化した人種主義に交渉と抵抗を仕掛けた。彼が日本の東西文明融合論に依拠して、日本が自由・民主主義・平等や近代的進歩などの西洋近代の価値を国民文化のうちに内面化・消化して「西洋文明の擁護者」であると主張して、日中戦争とヨーロッパでの戦争が進むのにつれて米国やヨーロッパ諸国の没落と日本やアルゼンチンの勃興を主張した。その際、帝国日本の戦時下イデオロギーと、アルゼンチンをアメリカ大陸における文明的な中心として展望する「マニフェスト・ディスティニー」的なナショナリズムとの架橋を試みた。榛葉の言論活動は、日本人移民、アルゼンチン生まれの2世、そしてホスト社会にも語り掛けるものであった。それは、アルゼンチンの支配的社会秩序や国民文化を受け入れつつも、その枠組との整合性を保ちながら、日本文化の導入によって移住国の国民形成の在り方に積極的に働きかけようとする、移住国で長年暮らす移民ならではのトランスナショナルな戦略であった。

補論では、グアテマラに生れ、パリを拠点に活躍したジャーナリストで、紀行文作家・文芸批評家でもあったエンリケ・ゴメス・カリージョ（Enrique Gómez Carrillo 1873-1927）に着目し、移民の受入れと位置づけとは異なる文脈で日本がどのように論じられたのかに関する一例を提示した。そのため、カリージョが日露戦争の末期とその後に執筆した批評や記事を取り上げた。世紀転換期のラテンアメリカ諸国の世論のなかで、帝国日本を近代国家の模範として評価し、かつ明確な伝統と特徴の文化を備えた国民共同体の代表的な存在として称賛することが一般的であった。カリージョの批評もこのような側面を見せてはいるものの、とりわけ朝鮮半島を中心に東アジアの政治的状況を描いた作品において、日本の帝国主義とナショナリズムに対する批判が明確に現れていた。このような作品に注目することで、カリージョは、東洋をエキゾチックな他者として美化するオリエンタリズム的な言説や、近代国家の模範といった日本をめぐる支配的な言説の枠組を越えた理解を提示していたことに光を当てた。

本論文は、以上のように、時期や地理的・地域的枠組、さらには政治的背景を異にしたいくつかの事例を取り上げ、日本とブラジルやアルゼンチンの国民形成をめぐるコンフリクトや交渉、共鳴や協力関係、そして齟齬や同床異夢を論じたものである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　Garasino Facundo Julian　）	
論文審査担当者	（職）　　氏　名 主 査　大阪大学　准教授　安 岡 健 一 副 査　大阪大学　教授　北 原 恵 副 査　大阪大学　教授　宇 野 田 尚 哉

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　日本とラテンアメリカの国民形成に関する移民史研究
―ブラジルとアルゼンチンにおける日本移民を中心に(1884-1951)―

学位申請者　Garasino Facundo Julian

論文審査担当者
主査　大阪大学准教授　安岡健一
副査　大阪大学教授　北原恵
副査　大阪大学教授　宇野田尚哉

【論文内容の要旨】

本論文は、19 世紀後半から 20 世紀半ばに至る、日本からラテンアメリカ（とくにブラジルとアルゼンチン）への移民の歴史に関する研究である。著者はとくに、日本とラテンアメリカ双方における「国民」の形成過程という文脈に、移民送出と受入に関わる言説や政策、移民自身による社会的諸活動を位置づけることを試みた。

第一章では 19 世紀後半に試みられた、榎本武揚が会長を務めた殖民協会の活動を中心に、同時代の福沢諭吉や浮田和民の言説をたどり、この時代における「文明化」という論理と、移民の送出とがどのように結びつけられたかを検討した。移民事業の実績としては、計画の不備から無残な失敗に終わったとされる殖民協会の活動であるが、文明化論から「平和的膨張論」につながる変遷の過程で、移民による現地社会への貢献というこれまでになかった論理が見出される点で画期的であった。この論理はアルゼンチンやブラジル側のナショナリズムが内包する開発主義と共振する点があった。

第二章では、日本力行会の指導者である永田稠の活動に着目し、永田の経歴とあわせて、日本力行会によるアリアンサ入植地建設の過程をたどった。永田のキリスト教的な移民理念に国体論が埋め込まれてゆく過程を浮き彫りにしただけでなく、同時代の需要側であるブラジルにおいて日本人移民を受け入れるかどうかをめぐる論争の中で論点となった「混血国民論」との対比において、永田の移民論の位置づけを明らかにした。永田の移民思想があくまでも「日本人」の移動と定着にこだわったもので、それが現地における日本人受入をめぐる論争とどのように一致し、あるいは乖離していたのかを論じた。

第三章では、政治家・実業家である上塚司が深く関与した 1930 年代のアマゾン開発事業についてとりあげた。アマゾンは当時、さまざまな国の資本が参入しコンセッション事業による開発が試みられていたが、上塚らのアマゾニア産業研究所を通じたジュート開発もその一例である。当時の運輸関係商品として成功したジュート開発であったが、日中戦争の展開により日本資本との提携はブラジル社会のなかで批判的に見られるようになった。ブラジルでの新体制の構築とともに日本人移民の諸活動が抑圧されるなか、アマゾン開発事業については協働が進んでゆくという過程を明らかにした。

第四章では、アルゼンチンの日本人移民社会において活躍した、榛葉贇雄の活動を明らかにした。榛葉はアル

ゼンチンにおける移民知識人として日本を代表する立場でさまざまな言説活動を行った。そこには日本を例外視する日本主義的側面も見られるものの、閉じた移民共同体を形成しようとしたのではなく、アルゼンチン青年への呼びかけを含む榛葉の議論はホスト社会と移民が共に変化してゆく動態的な社会を構想していた。

補章では、ラテンアメリカとヨーロッパで活躍したエンリケ・ゴメス・カリージョが日本について執筆した書籍について分析し、日本に関する知識のラテンアメリカにおける生産と流通について論じた。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の達成は、近年、国際的に研究がすすんでいる日本からの人の移動を、英語圏における議論を咀嚼しつつ研究し、送出地域・受入地域双方における「国民」形成過程の同時代性を明らかにした点である。本研究は日本語・英語文献はもとより、スペイン語・ポルトガル語の各種資料を用いて遂行された点も高く評価される。

とくに全体の構成を通じて永田稠・上塚司・榛葉贇雄といった個人に着目し、多角的に検討したことで、それぞれの活動の特徴を浮き彫りにし、相対化に成功した点が注目される。永田稠というすでに先行研究が多くある人物に対しても、現地側の議論や同時代の他の事例を取りあげることで新たな見方を可能にした点、上塚の事例では、日本側指導者の意識が国粋的・膨張主義的で、また現地の対日政策が厳しくなる状況にあっても、大規模開発というある種の「公共性」が移民事業にある場合、積極的な受容がみられる点を解明した点は貴重である。本論文はラテンアメリカ諸国が独立後に目指した「白人国化」路線と、日本の目指した「文明国化」が、移民という存在によっていかに媒介され、あるいはすれ違ったのかを捉えた労作である。

より検討を要する点として、現地側の政治的な党派性も含めた日本移民をめぐる対立や協調についての分析や、また、個々の知識人、たとえばミゲル・ランス・ラモスやアルゼンチン社会研究所に集ったメンバーたちがいかなる情報・知識に基づいて日本認識を創り上げていたのかについての解明が待たれるところである。この他、移民の集団におけるジェンダーの観点からする分析なども課題である。しかし、これらの点は今後のさらなる研究で克服可能なものである。19 世紀後半から 20 世紀半ばという長い期間に目配りし、移民事業を複数の個別事例に即して双方の国・地域の資料を活用しながら検討した点は日本研究に貢献する一つの達成である。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。